

『開卷驚奇俠客伝』と『三国志演義』

三 宅 宏 幸

曲亭馬琴は文化年間に『燕石雜志』（文化八「二八一—」年刊）、

文政初年には『玄同放言』（文政元「二八一—」三年刊）といっ

た考証隨筆を、天保初年には、「水滸後伝国字評半閑窓談」（天保二

「二八三—」年成立）や「三遂平妖伝国字評」（天保四年成立）など

の中国白話小説批評を著述する。馬琴の考証・批評の正否はさてお

き、これらの営為は、馬琴の作品に影響を及ぼしていないのである

うか。様々な書籍・資料・伝承を基にした馬琴の考証や、白話小説

を熟読して獲得した小説作法は、読本において有効に機能している

のではないか。こういった観点からの馬琴読本の調査は、いまだ十

分ではないように思われる。

本稿では、『開卷驚奇俠客伝』（天保三—六年刊）に『三国志演

義』と『開卷驚奇俠客伝』と『三国志演義』

義』の趣向利用が見えることを指摘した上で、『三国志演義』の本
文・注釈・評、馬琴自身の考証・批評などをふまえつつ、『三国志
演義』利用が『俠客伝』でどのように機能するのかを考察する。

『俠客伝』は後南北朝時代を背景とし、楠正成や脇屋義助などの
子孫たちが南朝遺臣として活躍する史伝物読本である。従来、馬琴
が「南北正閏順逆の理を正しく」という『俠客伝』の大意を自
解したことを受け、徳田武「馬琴の稗史七法則と毛声山の『説三国
志法』——『俠客伝』に即して「隱微」を論ず——」^②が、毛声山・
宗岡父子の批評や註を付した毛注本『三国志演義』所収「説三国志
法」に、その理念を学んだと論じた。だが、『俠客伝』に『三国志
演義』の趣向を利用したかには触れておらず、馬琴読本と中国小説
との関連を整理した崔香蘭氏^③も、『俠客伝』の項に『三国演義』の
書名を記さない。しかし、他の先行研究で、既に『三国志演義』の

趣向との関連は推測されている。まずは、その箇所を見ていくこと
 としたい。

なお本稿では、馬琴が少なくとも毛注本『三国志演義』、『新刊京
 本校正演義全像三国志伝評林』（馬琴旧蔵・現早稲田大学図書館蔵）、
 『通俗三国志』（湖南文山作、元禄二「一六八九」年序）など、数種
 の〈三国志演義〉を閲していることを考慮し、テキストを一つに限
 定しないために〈三国志演義〉と表記することとする。

二

『俠客伝』と〈三国志演義〉との関連について、麻生磯次「展開
 的考察」^④は、「小六丸が主君右少将の梟首を奪ひ取らうとして暗夜
 に途を失ひ、困じ果ててゐる所へ、数多の螢現れて路を照らす場面
 があるが、これも三国志演義で、漢の天子が逆賊を避けて、陳留王
 と共に蒙塵する一節に拠つたものであらう」と推し、日本古典文学
 大系60・61『椿説弓張月』（岩波書店）の頭注（後藤丹治注）も、
 『俠客伝』の螢の場面と〈三国志演義〉との関連に触れている。に
 もかかわらず、新日本古典文学大系87『開卷驚奇俠客伝』（岩波書
 店）の後注において、両作品の関連は明記されず、等閑視されてい
 る。これは、両作品の細かい比較や、その趣向を用いた意図につい
 ての検証が為されていないためであろう。

そこで、麻生論文が推測した場面を検証し、関連を確定する。
 『俠客伝』第一集卷之二、脇屋義隆の实子小六丸は、養父館英直の
 機転により、南朝遣臣の藤沢郷士、野上史著演の館に落ち着く。小
 六丸は主君（実は実父）の義隆が、藤白安同に急襲され討ち死にし、
 由比ヶ浜に梟首されていることを聞く。義隆の首を奪い返すため、
 夜半に一人で館を抜け出して、由比ヶ浜を目指す^⑤。

五月の天の癖なれば、降みふらずみ定めなき、如法闇夜に辿
 るくも、嚮に聞しを心当に、鎌倉を投て急げども、人家離
 れては田に畔に、枝道さへに多かれれば、去向は右歟左歟と、
 思ひ難つ、停在て、せん術もなき折から、叢蔭より忽然と、
 許多の螢群飛て、小六丸の身辺に来つ、^③路を照らし先に進
 て、這身の為に郷導を、做す歟と見えて奇なるかな。車胤が
 夜学の灯火に、易きといふ故事は、人作にして自然にあら
 ず。此は是童子の忠孝を、神明仏陀の相憐みて、恁る冥助を
 錫ひけん。小六丸は今この奇特に、感歎しつ、些も礙せず、
 螢の進むに従ひて、只管に走る程に、……果して由比の浜に
 来にけり。
 （第三回）

本場面の特徴として、以下の四点をあげることができる。①真夜
 中で道が分からず、田や枝道で道も悪い、②忽然と無数の螢が小六
 丸の周りに集まる、③無数の螢は道を照らして小六丸を誘う、④小

六丸の「忠孝」に対する、「神明仏陀」の冥助である。

では、『三國志演義』の場面を見る。馬琴が毛注本『三國志演義』を閲読していたことは書翰などから確認できるが、内容の理解し易さを勘案し、『通俗三國志』も以下に示す。

漢末期、悪政の元凶である宦官十常侍が將軍何進を殺害したことで、何進配下の袁紹らが宮中になだれこむ。十常侍の張讓と段珪は少帝と陳留王を連れて逃げるが、追っ手に見つかり、張讓は河に身を投げる。少帝と陳留王は草の下に潜む。毛注本『三國志演義』第三回「議温明董卓叱丁原 餽金珠李肅說呂布」を記す。

陳留王曰。此間不可久戀。須別尋活路。于是二人以衣相結。爬上岸邊。滿地荆棘。黑暗之中。不見行路。正無奈何。忽有流螢千百成群。光芒照耀。只在帝前飛轉。〔割註〕炎倒之勢昔如日月。今為螢光火德衰矣。陳留王曰。此天助我兄弟也。遂隨螢火而行。漸漸見路。

『通俗三國志』卷之一「董卓起兵入洛陽」には、

〔陳留王は〕論者補 帝の御衣を我衣と結び合せ草を分けて出玉ふ。目ざすとも知らぬ暗き夜に、荆棘路に満ちたりしかば、御足も傷れ損じて、進むべき様無ししかば、天を仰て泣き泣き玉ふ所に、不思議や数万の螢、何処ともなく飛集まり、光を放つて、帝の御前に来りける。陳留王大いに喜び、「是天の助

なり。これを指南に出候はん。」とて、螢火に道を引かれて、漸に歩み出玉ひ、是こそ人の通ふ山路と、思布処まで出て、

(巻之一)

とある。丸数字が交錯するが、①暗い夜、先に進むことができない、②数万の螢が、帝の前に現れる、③螢火に道を誘われる、④螢が現れたのは「天の助」である、とまとめられる。「五月」と「八月」とで時期の違いはあるが、闇の中で道に迷う点、無数の螢が少年を誘う点、その現象が「神明仏陀」や「天」という人智を超えた存在の冥助である点が、『俠客伝』と『三國志演義』とで共通する。

さて、『椿説弓張月』(文化四一八年刊)に、「折しもあれ一団の燐火、叢の中より燃出て、手元を照らす」(第廿九回)と、朝稚が闇の中で文字を書こうとしたとき、「燐火」が手元を照らす場面がある。この場面の後藤頭注には、「このおにびに導かれて志す所に至る趣向は、俠客伝第三回、八犬伝第六十四回にも応用されているが……共に三國志演義第三回、十常侍の乱のため、少帝と陳留王とが螢火に導かれて落ち行く条によるか」とある。「南総里見八犬伝」(文化一一一―天保一三年刊)の該当箇所は、「忽然として一団の陰火目前に燃出つ、先に立つ、現八を、導くごとく隠々と、閃きてゆく」(第六十四回)である。闇の中で困惑している折に、「燐火」「鬼燐」が周りを照らすこれらの趣向は、『三國志演義』から借

りたと考えてよからう。

ただし、『弓張月』や『八犬伝』では「螢」から「燐火」「鬼燐」と変更されるが、『俠客伝』では「螢」をそのまま踏襲するという違いがある。さらに、『俠客伝』の本場面は、馬琴自身が「八犬伝九輯再評・俠客伝四輯評」^⑩に、「俠客伝金閣の仇討の段のごとき、先づその趣向を考得て、扨この処は螢狩りにして、前輯小六が夢に螢火の闇夜を照らす照応にせん、と思ひて綴り候事二御座候」と記しており、楠姑摩姫が足利義満を金閣寺で暗殺する箇所を、本場面の「照応」としている。このことを見ると、馬琴が「螢」を『俠客伝』の重要な要素として意識していたと判断することができる。

「螢」を用いて、幻想的な場面に仕上げることも一つの狙いであろう。^⑪しかし、それだけの理由であれば、『弓張月』『八犬伝』のように「燐火」「鬼燐」でも構わないし、姑摩姫の仇討ちの「照応」にするほど、印象に残らないのではないか。

ここで論者が着目するのが、考証随筆『玄同放言』における記述である。馬琴は、本場面に登場した陳留王について、『玄同放言』巻二「漢火生剋應験弁」に、次のように記す。^⑫

○魏土は漢火に勝といふとも、乾燥^{かたき}も亦甚し、火徳はじめて滅^くて、焦土馬蹄に揚^あがる、〔割註〕晋泰始元年十二月晋王司馬炎、受^う魏禪、即^す皇帝位、奉^た魏主曹奂、為^す陳留王。亦是^す漢魏陳

留に験あり。〔割註〕初猷帝為^す陳留王、及^り即位、受^す制於曹操、操之後、亦受^す制於司馬氏、其及^り篡立、此其応報歟。」

(巻二)

『史記』や正史『三國志』などの「史伝」をふまえ、馬琴は漢や魏の国家滅亡の「験」として、「陳留王」を見出す。陳留王に漢の滅亡を読み取るわけである。この考え方と通ずる記述が、毛注本『三國志演義』に見える。先に引用した原文(五一頁上段)を御覧頂きたい。傍線部②直後の割註部に、「螢」について、「炎倒之勢昔如日月。今為螢光火徳衰矣」とある。漢王朝の初期、「火徳」は「日」のごとき勢いであつた(例えば、夢梅軒章峯作『通俗漢楚軍談』〔元祿三年序〕巻之一において、秦の始皇帝は二人の童が「紅の日輪」を奪い合う夢を見る。この様子は、後に起こる楚の項羽と漢の劉邦との争いを示唆しており、七十二度段られるも最後の一打で勝利し、「日輪」を持って帰つた童が劉邦であろう。「日輪」は漢の「火徳」としての強さも表している)。だが、漢王朝末期の少帝と陳留王、就中、後に猷帝となる陳留王には、「螢火」のごとき輝きしかなく、「火徳」である漢の衰微を示す、と註が付く。毛注本『三國志演義』第三回冒頭には、「天子者。日也。日而借光於螢火。不成其為日矣」という評もあり、陳留王の「火徳」は「螢」の力を借りなければならぬ程に衰えている、とも説明される。

『玄同放言』の記述や毛注本『三国志演義』の注や評をふまえる
と、『俠客伝』の「蜚」も、『三国志演義』と同じ機能を有すると考
えられる。つまり、「火徳」である南朝の衰微である。『俠客伝』第
五回に、新田貞方と従者畑時種が、とある庵で二羽の鶏が闘う様を
見る。その闘鶏を見た妙算は、赤鶏を「南方」（南朝）、黒鶏を「北
方」（北朝）に見立て、黒鶏が勝つたことを「南方火徳」が「北方
水徳」に敗れると、五行説をふまえて解した。このように、闘鶏に
よって「南朝」の衰微が示されるわけであるが、小六丸を誘う
「蜚」の趣向においても、その兆しを表す工夫が施されている。

だとすれば、『俠客伝』の「蜚」には『三国志演義』の漢の衰弱
が二重写しになっており、そのことにより、共に「火徳」である漢
と南朝とが滅ぶ意が含まれる、と考える。単に趣向を借りるだけ
なく、物語の構想を示唆する働きを持っているといえよう。

三

「蜚」の場面は、毛注本でいえば第三回に描かれ、『俠客伝』も同
様に第三回という序盤である。すなわち、『俠客伝』の序盤から
『三国志演義』の様相は賦与されている。

しかし、『三国志演義』は、曹操の台頭、漢王朝の衰微にあって、
その時流に抗う者たちを中心に描く。それが蜀の劉備であり、諸葛

孔明であった。本節では、補正成の孫、補姑摩姫に仙術を教えた九
六媛という仙女に、孔明の形象が利用されていることを述べる。

『俠客伝』第二十二回、九六媛に仙術を学ぶ姑摩姫は、足利義満
を討つ機会を待っていた。義満を早く討ちたい姑摩姫は、九六媛に
会いにしばしば仙閣に赴くが、九六媛は不在である。

① (姑摩姫は―論者補) 次の日は未牌時候より、……時を移さず
葛城なる、仙観に来にければ、多豆と知止満と出迎へて、一姫
上などで遅かりける。我師はきのお還り給ひて、おん身を等て
をします。卒給へ」とていそがせば、姑摩姫歛^②び且羞^③て、
掖^④れて奥にぞ赴きける。然けれども九六媛は、曲景に脇を倚^⑤
掛け、紋紗の团扇を顔に翳して、仮寐して死灰に似たり。姑摩
姫は這光景に、「折夕かり」と思ふのみ、呼覚さんはさすがに
て、等こと約莫半响あまり、九六媛やうやく頭を擡^⑥げて、声

朗に誦するを听けば、
① 誰知勇士生奇女。隻手能翻宿世冤。
② 俠概惟推古劍仙。忠魂雪恨只香煙。
③ 恁吟じつ、身を起せば、

『俠客伝』の特徴は、次の五点にまとめられる。すなわち、①姑摩
姫は九六媛をしばしば訪ねるが、九六媛は不在である、②何度目か
に赴くと、九六媛が帰ってきている、③九六媛は「仮寝」している、

(第二十二回)

④姑摩姫は九六媛を起こすのも悪いと思ひ、起きるのを待つ、⑤約半時してから、九六媛は目を覚まし、詩を吟ずる。

本場面は有名な「三顧の礼」の場面に基づく。劉備は徐庶に孔明を推薦されてからというものの、足繁く孔明の庵を訪ねる。しかし、①一度目も二度目も孔明は留守。なかなか孔明に会えない劉備だが、諦めずに三度訪問する。『通俗三国志』卷之十五「定三分」孔明出「茅廬」は、そのときの様子を次のように描く。

玄德の曰、「又仙童を勞せしむ、我來れるを報じ玉へ。」童子申しけるは、「先生家に居玉へども、今草堂に昼寝して未起。」

玄德の曰、「必ず驚しむべからず、関羽、張飛は門外にて相待。」とて、只一人内へ入り其辺を見玉へば、自然に風色幽雅

なり。堂上には、孔明几席の上に、安臥しければ、階下に又手して立玉ふ。……玄德は一時あまり立て、堂上を見玉へば、孔

明寝反して起んとせしが、又壁に朝て睡れり、童子進で起さんとしけるを、玄德又推とせめ、已に二時ばかり立つて、全身

倦疲玉ふ所に、孔明忽ち醒て、詩を吟じて曰、
大夢誰先覺 平生我自知

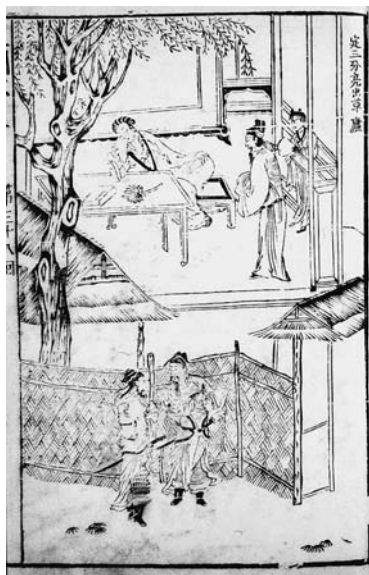
草堂春睡足 窓外日遲々
吟じ了りて身を翻し、
(卷之十五)

この場面の特徴は、①劉備は二度孔明を訪れるが、孔明は不在、②

三度目に庵に赴くと、孔明は帰ってきている、③孔明は仮眠している、④劉備は起こしては悪いと思ひ、孔明が起きるのを待つ、⑤約二時してから、孔明は目を覚まし、詩を吟ずる、である。細かく見ると差異もあるが、『俠客伝』の特徴と共通する。

差異の一つが、仮眠時の体勢である。孔明は「安臥」、九六媛は「曲象に肘を倚掛」けて仮眠している。だが、李卓吾本『三国志』口絵には、肘をついて仮眠する孔明が描かれ、孔明の前には团扇もある(図版Ⅰ)。馬琴が李卓吾本を閲した確実な確証は得られないが、こういった孔明のイメージが存したのかもしれない。^⑬

もう一つの差異が、それぞれが吟ずる詩である。九六媛は、



〔図版Ⅰ〕 李卓吾原評「三国志」(72才)
(早稲田大学図書館所蔵)

俠概けい惟ただ推おほ古ふる劍けん仙せん 忠魂ちゅうこん雪ゆき恨うらみ只ただ香か煙えん。

誰たれ知か勇ゆう士し生せい奇き女にょ 隻せき手て能よく翻ひるがへ宿すく世せ冤えん。

と詩を吟じ、一方の孔明が吟ずる詩は、

大夢だいむ誰か先さき覺さむ 平生へいせい我われ自し知ち

草堂そうたう春はる睡すい足あし 窓まど外がは日ひ遲おそ々々

である。一瞥して詩が異なることがわかる。

『俠客伝』の七言絶句は、『初刻拍案驚奇』巻十九から採る。「李公佐巧解夢中言 謝小娥智擒船上盜」に、次の詩がある。

俠槩けい惟ただ推おほ古ふる劍けん仙せん 除と凶きょう雪ゆき恨うらみ只ただ香か煙えん。

誰知たれ估こ客かく生せい奇き女にょ 隻せき手て能よく翻ひるがへ兩りゆう姓せい冤えん。

(男らしいは昔の劍仙。恨みを晴らすは香煙の女。誰が知る、商人の娘は。一人で二姓の仇を討った。)

『俠客伝』の詩が『初刻拍案驚奇』に拠ることは明らかであろう。

ただし、『俠客伝』では傍線部の「除凶」を「忠魂」に、「估客」を「勇士」に、「両姓」を「宿世」へと変更する。この違いは「初刻拍案驚奇」の内容と関係する。「李公佐巧解夢中言 謝小娥智擒船上盜」の梗概を以下に示す。

唐の開元年間のこと、予章郡の謝小娥は、巨商の父と夫を鉛陽湖口で殺された。夢に父と夫が現れて、犯人はそれぞれ「車中猴、門東草」と「禾中走、一日夫」であると言ったが、この謎が解けな

った。のち洪州の判官であった李公佐が、申蘭と申春であると解いてくれた。申蘭の家を探しあてた謝小娥は、名を謝保と偽り、男装して傭工となって住み込んだ。ある日、弟の申春が訪れ、申蘭は酒宴を開き、二人は泥酔した。小娥は申蘭を斬り、申春を捕えて郡役所につき出した。申春は処刑され小娥は旌表された。

女性がたつた一人で仇を討つ、という構成において、姑摩姫と謝小娥とは共通する。しかしながら、身分や仇との因縁がそれぞれ異なる。そこで馬琴は、『初刻拍案驚奇』の詩を『俠客伝』に対応させた。「估客」は「商人・あきんど」の意。商人の娘である小娥とは異なり、姑摩姫は足利義満の命を狙った「勇士」楠正元の娘であった。よって「估客」から「勇士」に変更したのである。また、小娥は父親と夫の二人の仇を討つため「両姓冤」とされるが、姑摩姫が討つた仇は、先祖から数代に渡つての因縁である。そのため、「宿世」の仇へと変更したと考えられよう。

以上の検証から、九六媛の詩に『初刻拍案驚奇』を用いて『俠客伝』に対応させる変容が見られるものの、姑摩姫が数度九六媛を訪ね、会えた時には九六媛が仮寝をしており、起きてから詩を吟ずる趣向は、『三國志演義』から借りきたことが確認できる。

さて、ここで注目したいのは、『三顧の礼』——孔明が仮眠——孔明の詩吟——孔明の天下三分の計、という展開である。孔明

は目を覚ました後、三度も訪ねてくれた返礼として、劉備に「天下三分の計」を授ける。この「三顧の礼」から「天下三分の計」に移るプロットが、九六媛に重ねられている可能性がある。というのも、『俠客伝』も同様に、九六媛は詩を吟じた後、南北朝争乱の「宿因」を姑摩姫に語り始める。つまり、九六媛を訪ねる——九六媛の仮眠——九六媛の詩吟——九六媛による南北朝争乱の説明、という展開なのである。九六媛の台詞の大部分が、新井白石『讀史余論』に基づくことは既に指摘される。その一部に、

虎狼野心の本性を見し、陡地反逆に荷担して、尊氏が股肱と做りたる、行状爪弾を做すに堪たり。然ば宋の儒者、朱熹の言に、「人は只曹操が、漢賊なるを知れるのみ。孫権も亦漢賊なるを、知らず」といひしに異ならず。(第二十二回)

とある。尊氏の臣赤松円心を評した箇所であるが、「曹操」を「漢賊」とする記述を載せ、さらに尊氏については、

尊氏・義詮が做す所、北朝に忠あるにもあらず、只国賊といはれぬ与に、立まらせし君なれば、君臣の名はありながら、万機の政事は毫ばかりも、御ころに儘せ給はず、是より王室卑うして、風俗陵夷に及びし事、歎くにもなほあまりあり。

(第二十二回)

と述べる。九六媛は曹操を「漢賊」と見なし、また尊氏については、

尊氏が周囲から「国賊」と言われなかったために北朝を立て、君臣とはいいながら君を蔑ろにしていると批判する。曹操を「漢賊」と見なすのは、馬琴の中編読本『昔語質屋庫』（文化七年刊）巻之二にも、「魏は漢の賊なり」という記述が見え、馬琴は曹操を「漢賊」と見なしていた。また、毛注本『三国志演義』第三十八回の冒頭の評にも、「孔明既云曹操不可与争鋒。而又曰中原可図。其故何哉。蓋漢賊不兩立」とある。この記述は「天下三分の計」の場面に對する評であるが、ここでいう「漢賊」とは曹操を指そう。

さらに、『玄同放言』巻二「漢火生剋應驗弁」には、次の記述が載る。

○孔明誠忠、務漢賊を伐にあり、二表三出、軀も亦いたく疲勞たり、志遂すといふとも、遺策魏延を誅戮し、此魏を以、彼魏に代ゆ、事に益あるにあらねど、魏を平る志一なり、天その忠を慰するといはん歟。(巻二)

馬琴は孔明を「誠忠」の人物、「漢賊」を伐つ役割を持った、漢の正統を守り抜いた人物と考証する。

これらの考証や馬琴の理解、用いた『三国志演義』のプロットをふまえ、『俠客伝』を見直せば、『三国志演義』の持つ機能が『俠客伝』の描き出そうとする歴史解釈や人物像と通ずることがわかる。すなわち、『三国志演義』の趣向を利用し、曹操を「漢」の「賊」

と見なす孔明の形象を重ねることで、「国賊」の足利氏を伐たんとする姑摩姫や九六媛に孔明の「誠忠」を賦与し、南朝を守る正当性を描出したと解すことができるのである。

四

『侠客伝』第二十六回、姑摩姫は足利義持の暗殺を企み、一休法師に捕らえられる。姑摩姫の故郷河内を領分にする畠山満家は、姑摩姫が赦され、自分の領地に帰ることが後々の患いになることを危ぶみ、獄舎にいる姑摩姫の殺害を図る。その様子は、

① 訟獄司に旨を示して、首を撃せんと欲せしに、姑摩姫は仙骨あり、且活人草を服したる、神効により、その刃、或は折れ、或は曲りて、那身を戕ふこと克はず。「然らば絞殺せ」とて、二三回絞らせしに、布まれ索まれ、皆断離て、殺すことを得ざりしかば、満家驚き、且怪みて、又鳩毒を用ひしに、それすら験なかりしかば、「原来那奴は、神仏の冥助ある、盛久・景清の儔ならん。食を禁めて乾枯せ」とて、その日より一たびも、水だに与へざりけれども、姑摩姫は自若として、餓渇の気色なかりけり。

(第二十六回)

とある。特徴として、①獄卒に姑摩姫殺害を命じる、②姑摩姫を斬ろうとした刀は、折れたり曲がったりする、③姑摩姫を縊ろうとす

『開卷驚奇侠客伝』と『三国志演義』

るが、布や縄がちぎれる、④飢えさせようとして、食や水も与えないが、姑摩姫の様子に変化はない、の四点をあげられよう。満家の命を受けた獄卒は、あらゆる手段で姑摩姫を殺害しようとするが、仙骨を持ち、活人草を服した姑摩姫を害することはできない。

右の姑摩姫の様子も、『三国志演義』に登場する仙人左慈を素材とする。ある時、曹操の前に左慈という仙人が現れる。左慈は自らが得た天書を曹操に与えるため、曹操を修行に誘いに来た。しかし、左慈の言葉に激怒した曹操は、左慈を牢に入れて拷問する。『通俗三国志』卷之二十九「魏王宮左慈擲鉢」を示す。

① 曹操怒て曰、「奴は是玄徳が方の間者なるぞ。急で拷問せよ。」と下知すれば、左慈手を撫て大に笑ふ。数十人の獄卒共来り集まり、左慈を搦めて、皮肉の微塵に成るほど撃たりけるに、左慈敢て痛める色なし。怪で能々見れば、熟く睡入て駒の音雷の如し。曹操あまりに興を醒して、③ 鐵の枷を首に入れ、鎖を以てよくくどざし、送て牢に入れけるに、忽ち枷も鎖も紛々として悉く落ち、左慈地上に臥たりければ、曹操大いに怒り、④ 晝夜七日が間飲食を与へず、椽々に責めけれども、左慈地上に端坐して、顔色つねよりも猶壯なり。

(卷之二十九)

まとめると、①曹操は左慈の拷問を命じる、②左慈は拷問されるが、

痛めた様子はない、③鉄の枷をつけるもすぐに粉々になる、④七日間飲食させないが、顔色は変わらない、となる。斬ると打つとの違いはあるが、物理的な攻撃にも、飲食を止める拷問にも顔色を変えないといった様相は、姑摩姫と左慈とで共通する。

『俠客伝』執筆と近い時期に著した「半間窓談」に、「道士徐神翁酒宴の席上に来臨して、詩を賦し仙術をあらはす、その為体、三国の時の左慈に似たるのみ」^⑩とあり、また『俠客伝』三集執筆直後の「三遂平妖伝国字評」にも、「幻術あるものに肢體不具なるも尠からず。三国の左慈がごとき、瘰癧にしてその術高かり」とあることから、馬琴が左慈について詳しくあったことは察せられる。

ではなぜ、姑摩姫に左慈の様相を用いるのか。左慈は陳留王や孔明のように、「火徳」である漢に属するわけでもなく、劉備に従うわけでもない。だが、馬琴が自作品に描く登場人物とそのモチーフとする人物との善悪を対応させることを考えれば、馬琴には左慈を利用したのにも何かしらの意図があるろう。毛注本『三国志演義』第六十八回冒頭の評には、「于吉未得爲仙若。左慈之仙則眞仙耳」とある。『三国志演義』では、左慈の他に于吉という仙人が登場し、呉の孫策のもとに現れるが、孫策に殺されてしまう。毛評は、そのような于吉と左慈とを較べ、左慈を「眞仙」とした。九六媛に教わった仙術を使い活躍する姑摩姫に、「眞仙」としての性質を賦与し

た可能性が、まず一つとして考えられる。

論者は他に、左慈の趣向利用を、『俠客伝』の南朝正統論に『三国志演義』の「正閏論」を重ね合わせた工夫と考える。『三国志演義』の「正閏論」や白石『読史余論』と『俠客伝』との関係は、前掲の徳田論文や大高論文に詳しいが、『読史余論』に記される日本の史実に『三国志演義』の理念を緋い交ぜにして、さらにそれを『三国志演義』の趣向を通じて描出するのである。満家が姑摩姫の殺害を図るようになったいきさつは、姑摩姫が足利義持を暗殺しようとして企んだことに始まる。一休法師に捉えられた姑摩姫は、將軍の義持を罵るが、姑摩姫の台詞には次のようなものがある。

「……義に太上天皇山後は、世を憐愍の歎慮深く、当時足利義満が、請稟せし義を勅許ましくして、数个条のおん約束を定められ、即便三種の神器を、当今に渡し給ひて、御受禪の義を行れしに、義満も義持も、虎狼の心を改めず、初の誓に背きまつりて、今までも小倉宮を、東宮に立まらせず。この故に南朝の、忠臣義士は、齒を切りて、義満・義持が誕妄権詐を、恨み怒らざるはなし。……快々頭を刎給へ。世に在る程は忘る、隙なき、梟悪無慙の大逆賊、終には思ひ知せんぞ」

(第二十四回)

姑摩姫は、義満も義持も南朝と北朝それぞれの天皇を順々に即位さ

せる約束をしたにもかかわらず、小倉宮を東宮に立てないことに怒り、今夜義持を暗殺にきた、と述べる。

一方、『三国志演義』で、左慈が曹操を激怒させたのは、次の言葉を吐いたためであった。『通俗三国志』卷之二十九、

「蜀の劉玄德は、漢の天子の宗親なり。汝なんぞ此人に位を譲りて、身を安く保たざる。若これに順はずんば、我いま劍を飛ばして必ず汝が首を取らん。」（卷之二十九）

左慈に仙人になるための修行に誘われた曹操は、自分の代わりに政治を治める者がいないことを理由に、左慈の誘いを断る。左慈は曹操に対し、劉備は「漢の天子の宗親」であり、その劉備に位を譲り政治を任せればいい、もし従わなければ曹操の首を取る、とまで言い放つ。劉備が漢の正統であることを、曹操に直言するわけである。これは、小倉宮を東宮に立てないまま、足利氏が権力を牛耳っていることに姑摩姫が憤り、義持に対して直言する様と通ずる。

かつ、左慈が登場する第六十八回（『通俗三国志』卷之二十九）で、曹操が魏王に即位することも関係していよう。『通俗三国志』に、「帝已」ことを得ず、鍾繇に命じて詔書を草せしめ、曹操を冊き立て魏王に封じ玉ふ。」（卷之二十九）とあるように、曹操は献帝に有無を言わせず自分を「魏王」に封じさせる。足利氏が天皇を蔑ろにする態度と、小役人出身の曹操が帝を蔑ろにして、王位を強要

する様とは共通しよう。国の違いから、「天皇」と「皇帝」という差異はあるものの、位の高い人物を蔑ろにして権力を握るという点において、義満・義持と『三国志演義』の曹操とは重なる。その曹操の「首を取らん」とした左慈を姑摩姫に重ねること、足利氏に曹操の形象が間接的に印象づけられる。つまり、『読史余論』の記述だけでなく、曹操を篡奪者、劉備を正統とする『三国志演義』に流れる理念を、趣向を通じて、『俠客伝』では「南朝」を「正統」、足利氏を「逆賊」として形成するのである。

姑摩姫が仇討ちを試みる趣向自体は、実録「明智光秀養女盛姫之伝」に拠る。しかし、明智光秀の養女盛姫が、姑摩姫のような拷問を受ける描写はない。また、『俠客伝』の執筆時、左慈の登場場面を載せる毛注本『三国志演義』下巻は馬琴の手元にはなかった。したがって、必ずしも毛注本を馬琴が参照して、本場面が形成されたと述べるつもりはない。だが、単なる表層上の趣向としてではなく、その奥底にある理念や思想、行為の意味をふまえて素材を用いる、という可能性を無視することはできない。

五

以上、『俠客伝』と『三国志演義』との関連を述べた。『三国志演義』では、献帝となった陳留王が曹操の暗殺を数度試みる。成功は

しなかったが、陳留王は曹操を漢の篡奪者として見ていた。同様に、孔明と左慈も曹操を「漢賊」と認識する。そのことを看取した馬琴は、『三国志演義』の趣向を重ね合わせることで、足利氏に対抗する南朝遺臣を描出した。「正閏を正しく」という、『三国志演義』と通ずる『俠客伝』の大意に読者が気づくヒントとして、馬琴は作品内に『三国志演義』の趣向を提示していたのである。²⁴

さて、本稿で述べてきたように、馬琴は『三国志演義』の趣向を利用するにしても、一つのテキストに拠るのではなく、割註の記述なども取り入れ、渾然とした『三国志演義』の世界を『俠客伝』に重ねている。さらにいえば、その手法は『三国志演義』だけにとどまるものではない。馬琴は様々な典籍・資料・伝承・実録を用いながら、かつ、馬琴が培った考証や批評をふまえながら、『俠客伝』を紡ぎ出す。論者はこれまでに、『俠客伝』といくつかの中国小説（『封神演義』『通俗武王軍談』『水滸後伝』）との関連を述べてきた。²⁵ そこでも触れたが、馬琴は『封神演義』『通俗武王軍談』などの殷周革命を題材にした中国小説を利用する際においても、それ単体というよりは、綯い交ぜにして利用する。²⁶

では、そういった馬琴の方法により、『俠客伝』はどのような世界になっているのか。例えば『封神演義』で善側に属す周王朝や、本稿でとりあげた漢王朝は、五行説では南朝と同じ「火徳」である。

「火徳」の共通点を持つ素材から趣向や人物造型などの要素を借り、また『説史余論』の歴史解釈をふまえ、『俠客伝』の大意を描き出すことにより、後南朝を物語背景とする『俠客伝』の裏に、古代中国で「正閏」を守り続けた人物達やその歴史を読み取ることができる。『俠客伝』の重層的な世界が形成されるわけである。

右にあげたのは一例に過ぎないが、このように、従来の研究によって指摘された素材を総括した上で、『俠客伝』という長編読本の総体に迫る必要がある。今後の課題としたい。

注

- ① 「八犬伝九輯再評・俠客伝四輯評」に、「又俠客伝は、やうやく三四編つゞき候のみにて、末々の趣向詳ならず。且作者の大意南北朝の正閏を正しくして、世の蒙昧に順逆を知らしめんとて、作り設たる物なれば、理論も多く……」とある。「八犬伝九輯再評・俠客伝四輯評」は『馬琴評答集』（八木書店、一九七三年三月）に拠る。
- ② 『日本近世小説と中国小説』（青裳堂書店、一九八七年五月）。
- ③ 「馬琴読本における中国古代小説受容の方法」（『馬琴読本と中国古代小説』、溪水社、二〇〇五年一月）。
- ④ 『江戸文学と中国文学』（三省堂、一九四六年五月）。
- ⑤ 新日本古典文学大系87『開卷驚奇俠客伝』（岩波書店）に拠る。
- ⑥ 『四大奇書第一種』（同志社大学図書館所蔵本）に拠る。『凶像三国志演義第一才子書』（文盛書局）も参考にした。
- ⑦ 『通俗二十一史』（早稲田大学出版部）に拠る。適宜、旧漢字を新漢字

に、句読点を改めた。また、濁点と鉤括弧を付した。

⑧ 日本古典文学大系60『椿説弓張月 上』（岩波書店）に拠る。

⑨ 小池藤五郎校訂『南総里見八犬伝』（岩波書店）に拠る。

⑩ 注①に同じ。

⑪ 得九智子「姑摩姫の仇討——『侠客伝』の女伏論——」（『読本研究新集 一』、一九九八年二月）は、「螢火が、夢とも現とも区別のつかない幻想的な情緒を醸し出し、これから起こる不思議な出来事への導き役を果している」と述べる。

⑫ 日本随筆大成編輯部『日本随筆大成（第一期）5』（吉川弘文館、一九九三年八月）に拠る。

⑬ 馬琴が所蔵した上図下文形式の簡本『新刊京本校正演義全像三国志伝評林』における当該箇所には、寝て、べつて仮眠する孔明の姿が描かれる。

⑭ 『初刻拍案驚奇 二』（ゆまに書房、一九八六年九月）に拠る。

⑮ 辛島驍訳『拍案驚奇』（東洋文化協会、一九五九年）を参照した。

⑯ 小川陽一『三言二拍本事論考集成』（新典社、一九八一年二月）を参照した。

⑰ 大高洋司「『開卷驚奇侠客伝』の骨格」（注⑤所収）。

⑱ 拙著蔵本に拠る。

⑲ 「半間窓談」は柴田光彦編『馬琴評答集 五』（早稲田大学蔵資料影印叢書刊行委員会、一九九一年九月）に拠る。

⑳ 「三遂平妖伝国字評」は『馬琴評答集 五』（注⑱既出）に拠る。

㉑ 建部被足作『本朝水滸伝』（明和一〇（一七七三年刊））を批評した『本朝水滸伝を読む并批評』（天保四年成立）で、馬琴は、作品内の人物造型において、史上の人物とモチーフとした人物の善悪を対応させない、と、「看官の虫貞」がつきにくいと評す。本文は早稲田大学図書館蔵

（古典籍総合データベース）に拠る。

㉒ 『侠客伝京師淀新評』に「姑摩姫の行状、光秀の女に似て換骨也、とある評も、知音の評にははずして、この人独よく見たり」とあり、「盛姫之伝」と『侠客伝』との関連に言及する。「侠客伝京師淀新評」は、『馬琴評答集 五』（注⑱既出）に拠る。徳田武「後南朝悲話——庭鐘・馬琴・逍遙」（注②所収）も、「侠客伝京師淀新評」を受け、両書の関連を詳細に検証する。なお、「明智光秀養女盛姫之伝」は静嘉堂文庫所蔵本に拠った。

㉓ 天保三年七月朔日付殿村篠斎宛書翰に、「就中、亥年の七月の火事ハ、旧宅のうら迄やけ込候故、書籍紛失も多く候ひキ。……『演義三国志』毛注の大本も、其節下帙紛失、只今は上帙斗有之候」とある。書翰は柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成』（八木書店）に拠った。神田正行「曲亭蔵書の形成過程——「東岡舎蔵書目録」と「曲亭購得書目」——」（『馬琴と書物——伝奇世界の底流——』、八木書店、二〇一一年八月）は、「曲亭蔵書目録」の記述をふまえ、馬琴が所蔵した毛注本は元々欠本であった可能性を指摘している。神田論文の述べるのとおり、馬琴が下巻を所蔵することがないのか、あるいは本当に火事で失ったのかは判断としないが、いずれにせよ、『侠客伝』執筆時に毛注本の下巻は、馬琴の手に無かったと考えてよい。

㉔ 注①で触れた馬琴の自解には、『侠客伝』の大意になかなか言及しない知友に対し、馬琴が業を煮やしたという経緯がある。

㉕ 拙稿「馬琴読本『開卷驚奇侠客伝』論——『封神演義』『通俗武王軍談』との関連を中心に——」（『日本文学』第59巻第2号、二〇一〇年二月）、拙稿「馬琴読本『開卷驚奇侠客伝』論（二）——『封神演義』『通俗武王軍談』との関連を中心に——」（『同志社国文学』第72号、二〇一〇年三月）、拙稿「馬琴の白話小説批評と読本——『半間窓談』から

『俠客伝』へ——」（『日本文学』第60巻第12号、二〇一二年二月）で、中国白話小説との関連や、馬琴自身の白話小説批評の応用が見られることを論じた。

②⑥ ②⑤拙稿に加え、近時、大高洋司「曲亭馬琴と「武王軍談」」（『日本語文化研究』第四輯、二〇一一年九月）も、『八犬伝』における馬琴の素材利用の方法として、類似した見解を示す。

〔付記〕 図版の掲載許可を賜りました早稲田大学図書館に、深謝申し上げます。